



にじいろ

「学年通信」は、生徒の皆さんが読み終わった後、必ず保護者の方に渡してください

「自分で『良い夏』をプロデュース！」 1学年主任 小澤 春美

学園祭が終わりました。5月末の定期試験終了直後から、早朝や放課後遅くまで作品制作に励み、素晴らしい作品に仕上げましたね。合唱も、どのクラスも声量があり美しいハーモニーでした。1年生全体を通して、よく頑張った学園祭だったと思います。記憶が新しいうちに自分が頑張ったところ、苦労したところ、次年度に挑戦したいことや今回の課題等を書き残しておきましょう。何事も記録しておくことが大事です。そして、しっかりと気持ちを切り替えて、学習や部活動に励む夏を迎えてほしいと思います。

さて、もうすぐ7月ですが、夏休みの計画は立てていますか？気になっている大学のオープンキャンパスに申し込んでみましたか？「まだ1年生」などと言って遠慮する必要はありません。憧れの大学に実際に足を踏み入れたことで、学習に対する意欲が“爆上がり”した生徒（卒業生）を、私は何人も見してきました。ある生徒は、某難関大学での講義を体験したことで「雷に打たれたような」衝撃を受け、どうしてもその大学に入りたいと願い、そこから人が変わったように勉強に打ち込むようになりました。勉強のモチベーションを維持・向上させるためには、大きな目標や夢を持つことが有効だと思います。オープンキャンパスが満員だったら、大学のキャンパスや周辺の学生街を散歩してくるだけでもいい。興味のある大学があったら、遠慮せずに現地を訪れてみましょう！旅行を兼ねて家族みんなで楽しんでくるのもアリだと思います。自分から行動を起こして、収穫の多い夏休みをプロデュースしてほしいです！

《保護者の皆さまへ》

お忙しい中、第50回蒼龍祭への御来場・御協力を賜り、ありがとうございました。保護者の皆さまに早朝からのお弁当作りや朝夕の送迎をしていただいたおかげで、1年生は大きなケガや病気もなく（欠席もなく）全員で学園祭を楽しむことができました。日々の温かな御支援と御協力に感謝申し上げます。いつもありがとうございます！

【7月の主な行事予定】

- 7月 1日（水）夏服完全更衣 生徒会役員選挙告示
- 1日（水）～3日（金）三者懇談（午後授業カット）
- 3日（金）▲上カセット
- 6日（月）マイナビ進学ライブ（④⑤⑥アイメッセ）
- 8日（水）▲上カセット
- 11日（土）土曜活用事業（サタチャレ）
- 13日（月）▲上カセット
- 17日（金）⑤人権講話
- 21日（火）前期中間試験 学年集会 大掃除（お弁当が必要）
- 22日（水）前期中間試験 納め式 全校集会 LHR（半日）
- 22日（水）～25日（土）理数コース宿泊学習会
- 23日（木）夏季休業（～8月19日（水））
- 23日（木）～28日（火）登校学習会（AM）



【1 学年リレー通信】

「座右の銘を問われれば」

3組担任 小倉 楓子

「経験に勝る知識なし」。座右の銘は何かと聞かれれば、私はこれを答えます。先生という職業に就いて5年になりますが、いつも心に置いておきたいと思っている言葉です。真面目な読者諸君は、どんな偉人名人の名言だろうかと身構えたことでしょうか、これは『鋼の錬金術師』という漫画に登場するキャラクター、イズミ・カーティスの言葉です。「何だ、漫画のセリフか」と侮るなかれ。この言葉には、学ぶという行為の本質があると私は思っています。

イズミ・カーティスは、本作の主人公エルリック兄弟の師匠であり凄腕の錬金術師です。苛烈な戦闘シーンでも服装は常に白衣にトイレスサンダル。まるで家事のついでにふらっと外に出た、というような出で立ちで、敵に名を問われれば、胸に親指を突き立てて「主婦だッ!!!」と答える。なんとも豪快な女性で、修業は鬼のような厳しさです。でも旦那様とはラブラブであったりと人間的にも魅力の尽きないキャラクターです。

そんなイズミ師匠にも修業時代はありました。若かりし10代の頃、彼女は当代随一と噂の老錬金術師に弟子入りします。どんな高度な修業が待っているのかと思いきや、彼女に課せられた課題は錬金術とは全く関係のないものでした。「ナイフ1本で、雪山で1ヶ月間生き残ること」。それだけ言って、老人はイズミを雪山に放り出します。寒さに震え、野生動物の襲撃に耐え、一日一日を何とか生き延びながら、イズミは考えます。師匠は自分に何を伝えようとしているのだろう。こんな修業が、錬金術と何の関係があるのだろう…。極限の状況下で問いに向き合ううちに、徐々にイズミは彼女なりの、ある一つの答えを導き出していきます。このとき得た答えは、彼女の錬金術師人生において核となるほど重大なものでした。さて、この話で面白いのが、イズミが師と頼んだ老人はまったくの人違いで、「課された修業は本当に錬金術とは無関係だった」というオチがつくことです。つまり、もとより師匠からの教えなんてものはなかったのだ、ということ。ではなぜイズミは、自身の哲学とも言える理論をこの修業の中から導き出すことができたのか。それは彼女が「教わる」姿勢だったのではなく、「学ぶ」姿勢だったからだと考えるでしょう。

「学ぶ」とはなにか。それは自分の中に、自分だけの哲学を作ることだと私は思います。何を見たのか。何を聞いたのか。どのように取り組み、どのように楽しんだのか。また、どのように苦しんだのか。問い続け、考え続け、行動し続けた人にしか、この哲学は得られません。問いと答えがずっとつながることもあれば、何年も経ってからふいにつながりを見せることもあります。一見無関係で、つながりのないように思えるそれら経験の断片が、いつしかあなたの知識となり、人間としての厚みとなる。それは誰にも盗めない、あなただけの哲学です。「将来就きたい職業と関係ないから」、「興味ないから」と、学ぶ機会を投げ出している人の、なんともったいないことか。挑戦しようか迷ったときは、イズミ師匠の言葉を思い出して一歩踏み出してみてもはどうでしょう。「経験に勝る知識なし」。